

樺細工：桜の樹皮を使った工芸

樺細工では、桜の樹皮を実用的・装飾的な道具の表面を覆うのに用います。城下町・角館を治めていた佐竹北家の家臣、藤村彦六が天明時代（1781-1789）にこの技法を秋田北部から角館にもたらしたとされています。

当初、樺細工を副収入源としていたのは主に角館の下級武士でした。しかし、明治時代（1868-1912 年）初期に封建制度が廃止された後、かつての武士はこの工芸を新しい生業としました。

樺細工産業が成長し、より組織化されるにつれて、問屋が出現し、技術が発展しました。樺細工産業の隆盛は大正時代（1912-1926）から昭和の戦前・戦中（1926-1945）まで続き、今日の樺細工の基礎を築きました。

この時期の間に、樺細工は見本市や皇室への献上品を通して秋田県以外でも知られるようになりました。1976 年、樺細工は秋田県で初の国の伝統的工芸品に指定されました。

角館では、職人は主にオオヤマザクラの樹皮を使い、三種類の主な技法を用います。「型もの」は、茶筒などを作るのに桜の樹皮を木型に貼り付ける技法、「木地もの」は、硯箱や台など箱型のものを作る技法、そして、「たたみもの」は、小さな入れ物やブローチ、ペンダントなどの小物を作るために、磨いた樹皮を何層も接着してから彫って磨く技法です。